子どもの自立と未来を語る会（旧：進路ガイダンス）の結果について

１　日　時　　令和５年８月５日（土）午後１時３０分～午後３時
２　場　所　　東海市立勤労センター１階多目的ホール
３　結　果
⑴　参加者　　７７人（うち東海市７３人）
（内訳）
・生　徒１２人（うち東海市１１人）　・保護者２９人（うち東海市２７人）
・教職員１１人（うち東海市１１人）　・その他２５人（うち東海市２４人）
⑵　当日の内容
ア　パネルディスカッション
・テーマ：不登校生徒の自立を支えるつながりと進路の問題
・内　容：卒業生、保護者、関係者による進路選択に関する経験談等
・パネラー：卒業生３人（大学生１人、高校生２人）
子どもが不登校の経験をした保護者２人
市スクールカウンセラー１人
社会福祉協議会職員１人
・コーディネーター：
市スクールカウンセラー　鎌田　陽世氏
イ　就職、定時制・通信制高等学校、専門学校、サポート校等の進路先紹介
４　状　況
【パネルディスカッションより】
・中学校２年生から学校に行けなくなった。ゲームに夢中になり、１日中ゲームをする日々が続いた。学校の勉強も分からなくなり、テストを受けることも学校へ行くことも億劫になってしまった。高校への進学は、通信高校を考えていたが、中学校の先生が定時制高校を勧めてくれた。定時制高校を見学して、自分の目で見て決めることができた。高校生活は、勉強も部活（バトミントン部）も頑張ることができている。先生、親や友達に勉強を教えてもらいながらついていけている。卒業後は、バトミントンの推薦で大学に入りたいと思っている。高校の幅が広がるので、学校や「ほっと東海」に行けるなら、少しでも行っておいた方がいい。（高校生）
・中学校２年生から学校に行けなくなった。学校へ行けなくなったきっかけは、友人との関係がうまくいかなくなってしまったことと、体育祭などの学校行事が嫌だった。家では、ずっとスマートフォンをさわってゴロゴロしていた。会うことのないネット上の友達と会話などをしていた。親に「勉強しなさい」と言われることがとても嫌だった。ある日、スマートフォンをさわっている自分を客観的に見た時、「これじゃ、まずい」と思った。高校進学に向けて、パンフレットを見て探した。受ける授業を午前か午後で選ぶことができ、またバイトなどができる自由な時間が作れる通信高校に魅力を感じた。高校では文化祭や体育祭がなく気持ちがとても楽でいられる。先生も優しく、将来のことを聞くと色々な学校を紹介してくださる。不登校だった時は、自分自身も親も不安でいっぱいだった。こんな私でも大丈夫だったので、今日この会に来られている皆さんは絶対に大丈夫です！と伝えたい。（高校生）

・中学校２年生の時に、学校の先生とうまく接することができなくなって、不登校になった。「ほっと東海」へ入級後、最初はなかなか通うことができなかった。中学校２年生の後半に通信高校を調べはじめ、行きたい高校が見つかってからは、目標ができ「ほっと東海」に通えるようになった。「ほっと東海」で市内の違う学校の友達や年下や年上の友達と話すことができるようになった。通信高校では、不登校など同じ悩みをもっている生徒も多くいた。高校の先生が、自分の得意なことを生かせる大学への進学を勧めてくれた。今、大学生活をとても楽しく送ることができている。学校へ行くことができない時期は、悲観的になったり絶望感を感じたりすると思うけれど、高校の選択肢はたくさんある。立ち止まることもあるが少しでも、こうしておけばよかったなと後悔しないように自分から行動して、たくさんの情報を調べていってほしい。（大学生）
・中学校１年生から中学校３年生まで学校へ行くことができなかった。発達障害のボーダーラインで、小学校の頃も勉強についていくのが精一杯な状態だった。子どもは、自分に自信がもてず、自己肯定感も低く、引きこもるようになってしまった。それでも子どもに対して、勉強してほしいという気持ちがぬぐい切れず、さらに子どもの心を追いつめてしまった。「ほっと東海」の先生から「ぼく、死にたい」と子どもが口にしたという話を聞いて、私自身も変わらなければと思った。子どもが今できていることや頑張っていることを褒めるようにして、子ども自身がどうしていきたいかの答えを待つことを心がけた。心の傷を負った分、人に優しくできる人間に育っている。子どものことで苦しかった時に「大丈夫だよ」と友人に言葉をかけてもらった時に心が救われた。（保護者）
・小学校５年生から中学校３年生まで不登校だった。小学校５年生の５月からぱたりと学校へ行けなくなってしまった。全く勉強をしない日々だったが、中学校３年生の２学期から「ほっと東海」へ通うようになった。通信高校は、全く学校に行かないわけではなく、週に３日登校する。新しい友達もでき、楽しく高校に通っている。親は、「学校にいかせなければ」という考えがなかなか抜けない。いい意味で子どもに手をかけ過ぎず、必ず笑える日がくる。（保護者）
・不登校の時期には波があり、最初はエンジン切れ、次に元気が出てくる、そして先が見えなくなる。本人も家族も生活が一変する。進路は大きなきっかとなり、将来に向けて考えていく時はチャンスである。このチャンスを生かし、親子で話し合うことが必要である。また、担任の先生やほっと東海の先生によく相談していくとよい。（市スクールカウンセラー）
・義務教育の間は、学校の先生、養護教諭、ＳＣなどに相談できる。卒業後に困りごとを言える場所が必要である。その窓口として「ほっとプラザ」がある。「ほっとプラザ」だけではなく、相談場所は、たくさんあっていい。人に頼って、気持ちを吐き出すところ、自分が休める時間が大切である。福祉機関が連携をとって、相談について色々な選択肢を指導させていただけるよう努めていきたい。（社会福祉協議会）

【感想】
・普段聞くことのできないパネラーの方々の体験を拝聴することができて、自分の子どもと重ね合わせて考えることができた。（参加者保護者）
・色々な選択肢があるということが分かりありがたかった。子どもの個性を大切

にしながら一緒に考えていきたい。(参加者保護者)

・パネラーの皆さんの話を聞くことができてよかった。本人はもちろんですが、親の皆さんもとても苦しい時間だと思う。このような会で共有することで心が楽になるように思えた。自分だけが特別ではないし、将来も無限に広がっていると思えた。（参加者保護者）

・不登校について何も分からない状況で、不安と焦りでいっぱいでしたが、ようやく不登校を受け入れスタート地点にいると思う。子どもに学校ではなくてもどんな進路でも大丈夫！と言ってあげたいですが、今は休息中と思い言葉を心で止めておきたい。歴史のある会と知り、有意義な時間をもてた。（参加者保護者）

・不登校を乗り越え進学したパネラーの方々の話を聞いて、前に進むことができると知り安心した。保護者の方の話は、はっとさせられることもあり、子どもに「大丈夫！」と伝えたい。（参加者保護者）

・話を聞くことができてよかった。ためになった。将来に向けて自信がついた。（参加者生徒）

・実際に話を聞いて、資料を見ているだけの状態よりも高校の様子などを知ることができた。悩みを抱えている人はたくさんいて、１人じゃないと感じることができた。人といると疲れてしまう時が少しあるので進路に不安を感じていたが、寄り添ってくれる場所があると知り安心することができた。このような機会をいただいたことにとても感謝している。家族と一緒に調べてみたい。

(参加者生徒)

・体験を通しての話は、とても重みがあると感じた。とても参考になった。本日の会が参加された子どもたちや保護者の方が少しでも軽くなり、先の見通しを少しでももってもらえたらうれしいと思う。（参加者教員）

・今年も大変意義のある会になったと思う。本校にも多くの不登校生徒がいる。担任として、今回のようなパネラーの方の話を聞くだけでも指導の幅が広がると思った。（参加者教員）

・当事者の話は、やはり心に響くものがあった。パネラー（保護者）の方が追いつめられて、子どもに手をあげてしまったという話は、特に胸につまる思いがした。今日の話が今苦しんでいる誰かの心の支えになるといいなと思った。（その他）

・通信の学校によっては、通う回数や行事の有無が違うなど、詳しく話をしてもらって分かりやすかった。パネラー（保護者）の方は、その時の不安や考えを素直に話してくださった。前向きになるような話が多くあり、悩んでいる子どもや親にとって参考になることがたくさんあった。

(その他)

5　来年度へ向けて

・パネルディスカッションの卒業生や保護者パネラーの話に引き込まれるように熱心に話を聞いていた。終了後の感想には、思いを共有したり、励みになったりする貴重な機会となっていることを感じた。不登校が増加する中、今後も開催を継続する必要がある。

・教員にとってもさまざまな経験を経た立場から話を伺える貴重な場であり、小中学校関係なく、不登校傾向の児童生徒の義務教育後の進路について学ぶことができるので、今後も参加を勧めたい。